

皆さん、こんにちは。しっかりした返事が返ってきてうれしいです。桜の咲くいい季節になりました。私は今時分からゴールデンウイーク明けぐらいの芽吹きがが一番、一年じゅうで好きな時期ですけれども、皆さんはどうですか。

若葉が薫風に揺れたり、初夏の太陽がこうきらきら輝く姿は、ちょうど今日の皆さんを見ているようなさわやかさを感じます。ですから、誰しもがエネルギーになる、それがこの新緑の時期というように思います。ですから、私は大好きです。

今日は約100名近くの新入職員の皆さんがいらっしゃるとお聞きしましたが、どこからみえているか知りたいので、手を挙げてくれますか。南から、富士見町から来られた方、原村、茅野市、今日は諏訪市もいますか、諏訪市はいない。下諏訪町、結構多いな。岡谷市。辰野町もいるのかな。箕輪町。南箕輪村、はい。それで全員ですね。

はい、ありがとうございます。

これから約1時間の講話ということでございますけれども、皆さんは採用されて、もう嫌というほど公務員とはこうあるべきだということたたき込まれていると思いますので、今日、私のレジュメには「公務員の常識」とありますけれども、どちらかという公務員の非常識の方の話をして入っていきたいと思っています。要は、そのような公務員にはなっていないというような話から入っていきたいと思っています。

よく「公務員の常識は民間の非常識」という言葉がありますけれども、聞いたことありますか？ あと、「公務員がやることは信用するな」、「公務員が決めたことは当てにするな」、そのようなことを、ちょっと皮肉で言われることがあります。

私は市長になって今年が2期目の最後の年になりますので、今8年目に入ったわけです。

私は民間から入りましたので、市役所という組織の中では唯一の市民、一般人であると自分の中で思い仕事をしてまいりました。そうでなければいけない。選挙で選ばれて市長になる、町長や村長も同じですけれども、公務員になってはいけないという思いでやってきています。

これからもそのような思いでやっていこうと思っていますけれども、公務員がいけないということを言っているわけではないです。そのような公務員にはなっていないからということで、今お話をしています。

具体的にはどのようなことかといいますと、公務員の皆さんはいろいろ勉強してきたね。公務員とは何たるべきか、してはいけないことや守らなければいけないことなど、それは当然そうです。その道から外れてはいけないわけです。そこに重きを置いてしまうものですから、思いが民間に伝わらないということがちょくちょく出てきます。

公務員の皆さんが言っていることは間違っていない。正しいことを言っています。例えば要綱などがあって、その要綱に従ってやると「これこれ、こういうふうにしなればいけない」「そうそう、それでいい」「こうしなければいけない」「これはできない」ということをきちんと守っていくのが公務員であるわけですし、やはり公正でなければいけないし、

公平でなければいけないし、明瞭でなければいけないし、それはそうなのです。だから、公務員の皆さんがやっていることは間違っていない。正しいことをしている。そうなのです。だけれども、それだけだと民間には伝わらないということがたくさんある。

例えば、これから消費増税に伴って1万円が給付される。それから、子育て世帯にも給付がされる。基本的には申請をしなければもらえない。だから、もし、私がもらえる立場だったけれども、申請しなかった。それで、「どうして俺のところに来ないんだ」と言ってくる。皆さんは「これはこのような制度で、これこれ、このようなことで、あなたは申請をされなかったから、申し訳ないですけど、もう期限も切れてるしできません」。間違っていない。言っていることは間違っていないし、正にそれは正しい。だけれども、民間の人たちというのは、それだけだと届かない。ぜひ皆さん、親身になって市民サービスに努めていただきたいと思います。

では、どのようなことをすればいいのか、ここがポイント。期限が切れているけれども、かわいそうだから内緒で交付してやるなどということはできないね。それをやってしまうと、正に公務員がしてはいけないことをすることになる。そのようなとき、要は、「じゃあ、もう交付期限が切れてるし、申し訳ないけど、できない。だけど、それに代わるこういう制度だったら今使えるから、こっちでちょっと申請してみましようよ」など、そのような対応ができるかどうかということ。

しゃくし定規で「これはだめです」ということで切ってしまうのではなく、要は、困った時に、「それは動かせないけど、他にこういうこともありますよ。こういう申請をしたら、お宅の場合、こういう手当がもらえるかもしれない。ぜひそれを検討してみましよう」ということを言ってやれるかどうか。それぞれの職場によって、内容は千差万別たくさんあるかと思いますが、ぜひ皆さんには、そのことをずっと思い続けられる公務員でいてほしいと思います。

また別の見方をすると、皆さんにはセールスマンになってほしい。行政というのはもう最大のサービス業です。だから、皆さんはセールスマンにならなければいけない。今の公務員の皆さんはきっとそのような感覚を持っていると思いますけれども、昔の公務員はそのようなものを持っていなかった。セールスマンになるなどという感覚は多分なかったと思います。中にはいたかと思いますが。

要は、民間だと、天然水、この商品を買って買ってもらって、やっとな給料がもらえる。でも、公務員の仕事というのは買ってもらわなくてもいいのですね、極端なことを言えば。例えば何かの補助金の制度を作る。一人もその補助金を申し込まなくて、結局その補助金は不要額として来年に繰り越したとしても、皆さんは給料がもらえるね。これを買うという努力をしなくても、給料がもらえる。それが、公務員のセールスマンという感覚を、私は失くしていると思っています。

けれども、本当にいいものだったらそれをきちんとPRして、よさを分かってもらって買ってもらおう。そして、お金が入ってくる。その中から給料がもらえる。役所は自分が売

らなくてもお金が入ってきます。税金などで徴収する。

一概に何もしなくてもということではないのだけれども、分かりやすく言うと、皆さんが売る努力をしなくても給料がもらえる。ここが最大の落とし穴といたしますか、甘くなると思いますか、そのような仕組みになっている。ぜひそのことを皆さん、常に忘れないでほしい。

職場、職場で、何を皆さんが売らなければいけない商品かというのは違って来るかと思えます。けれど自分のしている仕事を、そのことを、制度であれ、新しい事業であれ、きちんとセールスする、その感覚というものを忘れないでほしい。

だから、せっかく作った制度に年間1,000万の補助金を付けた。そうしたら、やはりそれが足りなくなるぐらいに、その制度を市民の皆さんが使ってくれるということは、それだけ市民の人が幸せになるということなわけです。その努力を、ぜひしてほしい。その対価として自分が給料をもらっているのだ。その感覚をずっと辞めるまで、みんな退職するまで、持ち続けてほしいと思います。

昼食後のこの時間が一番眠いと思います。私も午後1時から3時ぐらいの打ち合わせや職員からレクチャーを受けることが、一番つらい。つまらないレクチャーをされると、半分くらい、うとうとしながら。だから、皆さんもつまらなかつたら寝てもいいけれども、いびきだけはかかないように。もし、いびきをかいている人がいたら、つんつんところつついて起こしてやってください。

そのようなことで、公務員の取組をしているわけですけれども、2週間過ぎて、楽しいですか。楽しくないという人はいないね。みんな青雲の志をもって、それぞれの役場に入ったわけだから、楽しくないなどという人がいたら、何のために入ったのか分からなくなる。ぜひ、その楽しさというものを自分からも見つけてほしいと思います。

もう一つ、このような公務員にはなあってほしくないと思うことに、国や県のせいに、なるべくしないほしい。これはまた公務員のずるいところであって、またそれが結構いい武器になるのだけれども。「いや、申し訳ない。私たちはやりたいのだけれども、なにしろ県の制度がこういうことができないもんでできません。国の方でこういう決まりになるもんでできません」と。

すると、文句を言ってきた市民の皆さんも「そうか。国がそう言うことじゃしょうがないな」ということであきらめてくれますから、時にはこれも大事なことなのだけれども、確かに県や国が、このような制度であるからそれをできないということは最初に言ったことと同じですね。それはできないけれども、このようなことが市にはあるから、それをちょっと検討してみましようか、そのような対応をしてもらいたいということと、やっていくうちに、本当に時代遅れのこのような決まりが、なぜあるのだというものが出てくる。そのときは、ちょっと国や県を相手にけんかをするぐらいの、ぜひそのような気概で、そしてまた、本当にこれは決定的に違うと思ったらいろいろな動きを起こして、例えば市長に話をするなど、やはり国の制度そのものを変えていくぐらいの気概を、ぜひ皆さんに持

ってほしい。

ついつい長いものには巻かれろということで、その方が楽だから長いものに巻かれろということで気持ちがなえてしまっていく。仕事をしていけばしていくほど、そのようなことがよく見えてくるから。だけれども、間違っている、おかしいと思うことは、国や県に合わせるのではなくて、自らが新しい制度を作ってやろうというような、ぜひ気概を持ってほしい。ここにいる皆さんは、そのようなことができる明せきな頭脳を持っていらっしゃると思います。ぜひ体制に負けない、そのような思いを持ち続けてほしいと思います。

2番目に「こども部」の設置というものがあります。ストレートに今言ったことがここにつながるわけではありませんけれども、私の中には、やはりそのような国に抵抗する意味でもこども部というものを設置しました。

保育行政がありますね。保育園を運営する保育行政。これと、小・中学校を運営する学校の行政があります、義務教育。高校は県になりますけれども。これは、保育所は国でいうと厚生労働省の管轄。児童福祉の分野です。小学校・中学校は義務教育、これは文科省。市町村でいったら教育委員会の部署。要するに、部署が違うわけです。よく行政の縦割りという言葉聞きます。正にそう。けれども、子育て・教育はそのようなことは関係ない。ずっと一貫して赤ちゃんが生まれて、そして乳児期があつて、幼児期、保育園に入って、小学校、中学校、高校と一連に育っていく。それが保育園と小学校でぶつ切り切れているわけです。

茅野市には、「こども・家庭応援計画」、通称「どんぐりプラン」と言っていますけれども、これを作って、おなかに赤ちゃんができたときから18歳、高校卒業するまで、一貫して子育て教育をしていこう、そのような取組を平成14年から、その時、私はまだ市長でございましたが、始めました。

そのような中で、平成23年までは、それでも何とか連携を取ろうということで、保育行政の方から1係、教育委員会の方から1係が、同じフロアでブリッジを組んで対応していましたが、頭が二つあるためどちらが決定するのかなど、決定権がどちらか分からない。連携も、なるべく密にはしているけれども、連携不足のところもある。そのようなことがございました。

これではやはりおかしいだろう、何とかこれを一元化する仕組みをみんなで考えようということで、2年ほど研究しました。やはり職員はいろいろ言うてくる。保育行政の人間は、当時は健康福祉部こども家庭課だったか、いろいろ補助金の申請などをするときやはり厚労省につながる訳だから、このラインを大事にしたい。学校の方は先ほど言った文科省につながるから、こちらを大事にしたい。だから、なるべくいじりたくない訳です。

2年間、結構職員と激論を交わして、最後に、そのように周りのことは考えずに子供のことを主にして、中心に考えて一番いい理想な形は何だといったとき示したのが、このこども部という形でした。では、これをやろうということで、今はこども部という部をつくりまして、これを教育委員会に設置してあります。

ですから、こども部は茅野市の場合 340 名ぐらいの職員がいる。保育士さんが全部いきます。だから、教育長は当初嫌がった。そのような大所帯になって、学校の先生を見るだけでも頭が痛いのに、今度、園長先生から保育士まで見なければいけないからということで少し嫌がりました。でも、子供のことを考えて一番いい組織は何か。みんながつくってくれたものがこれではないか。では、これでやってみようということで、24 年に設置して、24、25、2 年が過ぎました。非常にうまくいっています。保育園と保育士さん、園長さんと小学校の校長さん、学校の先生との交流が、頻繁に行われています。

今は 6 階の同じフロアの中にあります。大所帯が 6 階にあるので、少し狭いけれど、そこに行くと子供のことは全部ワンフロアで解決する。非常に活気があります。

これも規制の制度等にこだわることなく、何をしなければいけないかということをメインにおいて考えれば、そのような結果が出る。だから、これから皆さんがいろいろやっていく中で、「おかしいな、おかしいな」と思うことがあったら、とことん研究して、自分一人でなくてチームを作ってもいいし、上司と相談してもいいし、ぜひ国や県、あるいは市にある今の制度を変えていく、そのような気概を持って取り組んでいただきたいと思いません。

そうすると、先ほどの話の中にも出てきますけれども、3 番目の、物事の本質を見極めるということが大事になってきます。先ほど、こども部をつくった。これは、こども部をつくりたかったわけではありません。子供の子育て・教育ということを考えたとき、何が一番いいのか、どうすることが一番いいのかと考えたときに行き着いたことが、結果として、こども部であったわけです。これが、最初からこども部をつくろうと思ってやるときとうまくいかなかったと思います。何をしたいのか、そのためにはどうあるべきか、その結果、こども部ができたわけでございます。

ですから、これから皆さんがいろいろな仕事をするときに、その物事の本質ということをしきりと押さえてほしい。自分が今実施している事業もそう。常に何のためにこの事業をしているのだと。それに照らし合わせると、今やっているやり方が本当にいいのか、おのずと見えてくる。物事の本質というものを常に考えてほしい。そして、同じ職場の中で、あるいは同期の中で、自分が疑問に思ったり、ちょっとこの事業は何か違うな、そのようなことを感じるようになったら、しっかり議論をしてほしい。議論をするときに、物事の本質、これを皆さんは常に頭に置いてください。

往々にして事業のための事業、イベントのためのイベントというようなことが起きやすい。最初はみんな、目的があって、その目的を達成するためにイベントや事業は始めているはずですが、でも、それが幻想化されてきて、イベントのためのイベントになっていやしないか、事業のための事業になっていやしないかということ。

それは、皆さんだからそのことに気づくのです。これは、自分の仕事として 3 年、4 年やっていくと、みんな、どのような人間もそうだけれども、それがもう当たり前になって、あまりそのようなおかしいところに気づかなくなる。

だから、首長も4年に1度の選挙がある。だからいいのです。そこで選挙という洗礼を受ける。やはり自分なりに、今やっていることはこれでいいか、市民のためになっているのか、市のためになっているのか。選挙がなくても常に考えていますけれども、それをしっかり考えるのが4年に1度ずつあるということは、それがなかったらどれほどいい政治家でも、やはりどこかがおかしくなってくる。

だから、まだ皆さんは公務員に染まっていない中で、今の気持ちを大切にしてほしい。皆さんだから気づくことがたくさんあると思います。ぜひそのような目で、いろいろなそれぞれの行政でやっている事業・仕事を見つめ直してほしい。何かやるといったときに、何のために、誰のために、何を目的としてという物事の本質を、突き詰めてほしいと思います。

それには、いろいろなりサーチもしなくてはだめです。自分の一方向だけの考えで物事を判断するのではなくて、必ず360度、上からも下からも横からも後ろからも、いろいろな角度で事業の内容を見直してほしい。そうしないと、物事の本質というものはなかなか見えてこない。そのようなことをお願いしたいと思います。

4番目の縄文プロジェクト。これはちょっと時間をいただいてお話をしたいと思います。

縄文時代というのは分かりますね。私たちが子供の頃は、大体社会は縄文時代から始まるのだと。一時期、教科書から縄文時代が外れた時期があったと思うのだけれども、皆さんが小学生の頃はありましたか、縄文。私たちの頃は、弥生は登呂遺跡だった、静岡県の、それが来て古墳時代へとつながったのだけれども、その縄文時代の縄文。

この長野県、山梨県、それから新潟県あたりは、縄文中期といわれる今から5,000年ぐらい前は非常に縄文人が多かった。多分日本で一番人口密度が高かったのがこの近辺だというように思います。上飯田の方にもあるね、縄文の遺跡。あったね。ないか。岡谷はある。上伊那にもあると思うのだけれども。塩尻にはあるね。平出遺跡という大きいものがあるし。

茅野市はその中でも、本当に遺跡がたくさんあるまちです。ですから、工事をするのはちょっと大変。道を造ろうと思って、遺跡が出てくると、それを調査しなくてはいけない。今、保育園の建て替えをやっているけれども、その調査のために1年間余分に時間がかかりました。1年間調査して、その結果を残してからでないといけない、これは文科省の方が結構厳しく。それは置いておきまして。

レジュメの裏に土偶がございます。上の方が「縄文のビーナス」といいまして、平成7年に国宝に指定された日本で一番古い国宝です、5,000年前の。下の方の「仮面の女神」というものがもうじき国宝に指定されます。5月の末か6月の頭ぐらいと思っていますけれども、非常に茅野市にとってはうれしい出来事でございます。これで国宝が二つある。長野県で国宝は八つぐらいありましたか。松本城もそうだし、善光寺もそうだし。けれども、二つあるところというと、多分この茅野市だけになる。ちょっと自慢。

今、茅野市で縄文プロジェクトという、その縄文を生かしたまちづくりに取り組んでい

ます。その取組の非常に励みにもなります。追い風にもなります。この機会を十分に生かしていこうと思っていますけれども、なぜ縄文かということ、ここがポイントです。これからお話しすることは、先ほど言った、物事の本質がどこにあるのかということのつながりです。

今言ったように、非常に茅野市はそのような縄文の遺跡や遺物には恵まれています。国宝がこれで二つになる。それから、特別史跡という、尖石遺跡というのだけれども、それがございます。日本中に縄文の遺跡は全国で3万5,000近くあります。そのうち史跡といわれるものが142カ所。このうち3カ所が特別史跡、全国で。そのうちの一つが茅野市にございます。言うなれば、遺跡の国宝。だから、茅野市には三つの国宝があると言ってもいいのではないかと思っています。

そして、その尖石遺跡というのは、本当に戦後まもなく、一民間人で発掘をした宮坂英式先生という方がいます。大学の教授でも考古学者でも何でもなし。一市民の方が本当に、地元の方でしたけれども、私財を投げ打って発掘した。茅野市の名誉市民の第1号ですけれども、そのような方がいる。

そのようなことも、割と地元の間が知らない。やはり、これはすごくもったいないことだということに思いました。皆さん、それぞれのまちに宝があるね。辰野だったら荒神山も宝かな。蛸も宝だね。箕輪町、あれは南箕輪になるのか、すごくきれいな松林があるではないですか。前、田中知事のときに、あそこに子ども未来センターを造ろう、反対などと言って話題になった、あのような松林も私は宝だということに思いますし、そのような風景ばかりではなくて、岡谷のウナギ、これも私は宝だと思います。岡谷で会議があるときの昼飯はウナギにしてくれと岡谷の市長にお願いをして、いつもそれにこたえてお昼にはウナギが出ますけれども、おいしいウナギ、これも宝。

やはり、そのようなことも、まず地元の人たちが本当に大切に、誇りに思って行動しなければ本物の宝にはならないし、ましてやそれでよそから人を呼ぶなどということは、そう簡単にはできない。

そのようなことで、国宝があつて、特別史跡があつて、名誉市民第1号の市民の方もいて、だから、茅野市民はもっとこの縄文というものに対して関心を持って生活しようということが、一つの要因でありました、縄文プロジェクトをする。

もう一つ、これが、どちらかというより更に私は、今、縄文をもっともっと私たちが知らなければいけないことかなと思ったことです。それは、その縄文人の生活、あるいは生き方の中に、現代の日本人、そしてまた現代の社会、その抱えている課題を解決する糸口がある、そう思ったからです。縄文時代、縄文人の生活、縄文人の生き方、縄文人の考え方をすることは、今抱えているわれわれ人間の問題、あるいは社会の問題、それを解決していく糸口が私はあると感じたわけです。

今日的な課題はたくさんありますね。例えば環境でいえば、地球温暖化の問題、生物多様性の問題。経済でいえば、貧困化が進んでいる、経済格差が起きている、そのような問

題。社会全般でいえば、コミュニティがない、家庭が崩壊している、要するに「きずな」がなくなった、そのようなことが言われています。人間の社会でもいじめの問題があったり、あるいは孤独死、そのような問題が起きたり。

そしてまた、最近の犯罪を見ていて思うことは、理由がない。私も大昔のことは分からないけれども、大概人間の行動というのは理由がある。殺人などしてはいけないのだけれども、やはり、いろいろなあつれきの中で殺してやりたいぐらい憎らしく思って殺してしまった。物を盗むにしても、腹が減ってしょうがないと。それで、パンを万引きしてしまった。理由があって、行動があった。でも、今の犯罪を見てると理由がないのではないか。ただ人を刺したかった、あるいは経済的にも恵まれている人が万引きして捕まる。やはりどこかおかしい、そのような問題。

それから、国際社会を見ても紛争が絶えないね。日本近辺、日本と韓国、日本と中国、これも何かきな臭くなってきているし、ロシアとウクライナ、これは結構まずい。そのような問題。

それらの原因はそれぞれあると思うけれども、一言で全部ひっくるめて、環境も社会も経済も人間の行動も、全部ひっくるめて原因は何かと一言で書けと言ったら、ちょっと1分やるから書いてみて。一言で書けと言ったら、自分は、その原因は何かと言われたら何と答えるか。みんな考えるだろう。みんなに言えとは言わないけれども、そこで考える。それが物事の本質は何かということを考えることにもなる。一言だ。一言といいますか、5文字以内ぐらい。書けましたか。はい。

私は、共に生きるという気持ちがなくなりつつあるのだらうと思っています。共に生きる。その共に生きるのは人間同士もそうだし、よくいう自然との共生ということもいわれているけれども、共に生きるという思いが人間の中から薄れつつある。それがすべての原因になってくるのではないか、つながっていくのではないかというように思っています。

では、茅野市で栄えた縄文時代はどうだったのだらうということに、思いを巡らしました。本音を言うと、私が縄文に興味を持ったのは、平成21年に、先ほどの二つの土偶が大英博物館に行ったのです。そのときは国宝と重要文化財でした。イギリスから1年前に大英博物館の方が来て、この2体を貸してほしいと。そのとき他に、青森県に一つ、秋田県に一つ、北海道に一つ、茅野に一つ、四つの国宝がありました。それを全部一度に集めたいと。茅野からはこの2体を貸してくれと。

これもちょっと自慢になってしまうのだけれども、当時、大英博物館で作った土偶展というものをやったのだけれども、その表紙にこの「仮面の女神」を使っていたわけです。私は、とんちゃくがないといいますか、怖いもの知らずというのか、その場で一つ返事に「いいよ」と返事をしました。そうしたら、向こうの方が驚いていた。2体あったら「1体は貸すけれども、1体は」と言われるのが普通らしい。そこで、即決で返事をもらえるなどということもまずないということで非常に感激してくれまして、それだからこれを表紙に使ってくれたのか、ちょっと分かりませんが。

私も行って参りました。行ったその四つの国宝が一堂に会したのは、そのときが初めてでした。だから、日本ではなくて、イギリスで初めて四つの国宝の土偶が一堂に会した。そのようなこともありまして、もしかして結構すごいのではないか、そのようなことが正直ごとです。では、もっと縄文のことを勉強しようと。

だから、偉そうに言っても、私もつい5年ぐらい前は、本当に地元にながら、それほど縄文のことを知っていたわけではありません、白状すると。そのようなことがあって縄文のことをいろいろ調べていると、先ほど言った、考古学的な価値以外に、今の病んでいる社会、人間、それを再生させてくれる糸口があるのではないかと思うようになりました。

先ほど言ったいろいろな課題を考えたとき、縄文時代はどのような時代だったかという、1万年ぐらい続いているのです。縄文の始まりは今から1万3,000年ぐらい前で、終わりが3,000年ぐらい前ですから、1万年の長きにわたって縄文時代が続いた。それだけでもすごいね。部族間の争いなどがなかった社会といわれています。食べ物をちょっと取り合ったなど、そのような小競り合いのようなものはきっとあったのだらうと思いますけれども、戦争のような争いはなかった時代。

それで、縄文時代に初めて村の原型ができました。縄文時代というのは農耕の時代ではありません。採取や狩猟。ですから、動物を狩ったり、木の実などを採りにいったりして過ごした時代です。それまでは放浪の遊牧民ではないけれども、ここで食糧がなくなったら次のところへと移動したわけだけれども、縄文時代はそうではなくて、村ができて定住して、なおかつ狩猟・採取の生活ができた。

どのようなことか。それは自然を大切にしたからです。必要以上に物を採らなかった。「足るを知る」という言葉がありますけれども、そのような生活をしながら、1万年にもわたって文化、その時代が続いたわけです。

また、この土偶や、あるいは縄文土器は、皆さん分かりますね。あそこに書かれている紋様などを見ると非常に意味がある。そして、素晴らしい紋様です。今、私たちにひな形を見ないで作れといっても、なかなかあの紋様が描けない。それほど創造性や精神的にも高いものを縄文人は持っていた、そのような時代です。

ですから、先ほど言ったいろいろな今日的な課題を解決していくのに、縄文人は「ああ、こんなことしてたんだ、そういうことができたんだ」ということを私たちが学べば、その解決の糸口を必ず見つけられる、私はそう思っています。

もちろん、今、縄文時代の生活をしなさいというわけではありません。そのようなことはできないわけです。けれども、本質をしっかり押さえることで、今日的な課題が少しでも解決していくだろう。それを私たちは、今しなければいけないのではないか、そのようなことを思いました。それが二つめの理由です。

考古学的にも素晴らしい宝が茅野市にはある。これをもっと生かそうではないか。そして、それだけではなくて、縄文を学ぶということは、今日の社会、人の生き方というものを見直す、そのようなものもあるだろう。これはやる意味があるのだと、そのようなこと

を思い、今取り組んでいます。

これからますます科学技術が進歩していくでしょう。私はまだガラケーです。皆さんはスマートフォンですか。皆さんは出始めた頃の携帯電話を見たことがありますか。多分ないでしょうね。今から25年ぐらい前、青年会議所という団体の一員でした。新し物好きの人がいて、「これは携帯電話だ」と当時持ってきたものが、極端にいうと、バックぐらいのバッテリーがあって、その上に普通の固定電話の受話器といいますか、話すところがあるではないですか、あれが乗っかっている。非常に携帯電話とは言えないような代物でした。それがもうあつという間にこれだけ進歩して、今は電話というよりもパソコンであったり、カメラであったり、お財布であったり、ものすごい進歩ですね。これからもどんどん進歩していくのだらうと思います。

そのようなときに、私たち人間がそれに追いついていけないだらうというように私は思っています。それだけのことを使いこなせない。またそれから起こるいろいろな課題、今もあるネット依存症ではないけれども、そのようなものに追いついていけない、人間の方が、そのような時代にますますなると思っています。

だから、私たちは相当強い倫理観を持たないと、世の中をうまくコントロールしていけない。そのようなことも、この縄文の人たちがどのようなことを考え、どのような生活をしてきたのか、それをしっかり知ること。そして、少しでも、先ほど「足るを知る」と言った部分、そのようなものを含めて自制できるものを持たないと本当にどのような社会になってしまうのか、未恐ろしいと私は思っています。

正にシュワルツェネッガーの未来から来る話があったではないですか。あれはコンピューターに支配された未来から来たわけでしょう。あれは何でしたか、そう「ターミネーター」。本当にあのような社会になってしまう可能性はあると思います。私たちがよほど強い倫理観を持たないと。だから、そのような意味では、これからますます人間として生きていくのは厳しい、苦しい、そのような時代が来ます。皆さんは本当に強い倫理観を持ってください。

ついでにもう一つ、倫理ということで言うと、これは二宮尊徳の何代目かの子孫の言葉だそうですけれども、「倫理なき経済は罪悪である。経済なき倫理は寝言である」という言葉がございます。私は、これは非常に、経済人が特に押さえておかなければいけない言葉だと思っています。やはり、倫理なき経済、稼げばいい、もうかればいいというだけの経済は罪悪。やはり、経済活動をする上で、きちんと、それがどのような社会的責任を果たすのだという倫理観というものを持って会社を運営する、ある意味、役所もそうだと思いますけれども、そうでなければ、罪悪、悪。

けれども、やはりそのような経済、財政などという裏付けのない倫理、これは寝言だと。やはりきちんとした財政的、経済的な裏付けがあって事業なり、何なりをしていかなければ形にならない。ただ理想を語っているだけではだめ。「経済なき倫理は寝言だ」。これもぜひ頭の片隅に入れておいてください。「倫理なき経済は罪悪。経済なき倫理は寝言である」。

このバランスを取っていくのが正に政治であり、行政だというように思います。どちらかだけでもだめなのです。そのバランスをいかにうまくとっていくか。これから皆さんがその中心になっていくわけですから、覚えておいていただきたいと思います。

ぼちぼち時間になります。最後に、レジュメの枠を囲ってある、これも私の好きな言葉でして、「夢なき者に成功なし」という言葉がございます。「夢なき者に理想なし。理想なき者に計画なし。計画なき者に成功なし。ゆえに、夢なき者に成功なし」ということです。

冒頭に言いましたように、皆さん、本当に青雲の志、自分の夢を持って、それぞれの役所、役場に入ったわけです。その夢を形にするために、ぜひその若い力を惜しみなく発揮していただきたいと思います。皆さんが公務員としてそれぞれの役所や役場に来てくれたことを、心より歓迎します。頑張ってください。

以上でおしまいとします。